

千里の道も一歩から

法学部 教授 スザンネ・シェアマン

日本やアメリカと違って、ヨーロッパの図書館では、自由に本を探することはできない。しかも、私が学生だったころ、書籍の詳細の書いてあるカードの何百万枚が引き出しに置かれている「カタログ室」で、時間をかけて書籍を探し出してからカウンターで注文して、翌日ようやく手に入れた。書籍が期待はずれや注文間違いもあって、それについては何もできなかった。

一方、日本の図書館の多くでは、書籍はオープンに並べられて、すぐに手にとって確かめることもできる。整理番号は分野別なので、周りに類似している書籍もある。こうした図書館は天国のような場所であると思う。さらに、明治大学の図書館で自分が探している書籍がない場合、学生でも購入希望できる。

しかし、今度はこうした情報の中でく溺れる危険がでてきた。面白そうな本があまりにも多いので混乱するのである。レポートを書く場合、次のような時間配分を覚えておいてほしい。基本的な調査（テーマを絞る）は、全体の時間の10%、書籍調査は40%、（読書と整理を半分ずつ）、執筆活動は30%（真剣に考えずにくとりあえず書く）のがコツ、校正（丁寧に書き直すや書き足す）は20%にあてるとのことである。

最近のレポートでは、当然インターネットで見つけた情報が多い。最新の情報があるので、インターネットは貴重な情報源であるが、情報の正確さに疑問のあるページも多い。なぜか、だれにもチェックされずに載せられるのである。一方、書籍や雑誌の場合は発行者などにチェックされてより信頼もてるはず。しかし、偏っている書籍もあるので最低3冊で情報を確認したい。結局、インターネットに頼らないで、書籍とインターネットをうまく利用するという感覚を持つことは大切である。

インターネットにもう一つの危険がある。それはコピー&ペーストの誘惑だ。いくつかのマウス・クリックでよさそうなレポートを作れるのである。レポートを書く意味を失ってしまうことはもちろん、著作権の問題もあるのに、罪意識のない学生はいる。いうまでもないが、他者が書いたものを引用する場合、いくつかのルールがある。引用文はカッコで示し、必要な情報（著者名、タイトル、出版社、インターネットのアドレスなど）が明記する必要がある。

図書館での調査、レポートの作成は練習を重ねてうまくなるのである。現在の図書館は使用しやすく、こうした作業を簡単にしている。学生の皆様、最初の壁を越えて、研究の楽しさを味わってほしい。

テーマをもって図書館へ行こう

政治経済学部 教授 吉野 英俊

頃、ゼミを担当していると思うことがある。私は政経学部で「スイスのすべて」というテーマで教養ゼミ（演習A）を担当している。スイスに関するのなら政治であれ、経済であれ、社会、文化、あるいはスイス料理でも何でもよいから各自の関心に応じて調べ、年度末に学部の冊子「教養セミナー」に発表する、といった授業である。永世中立、傭兵、銀行、時計産業、二度の世界大戦とスイス、EUとスイス、多言語主義、登山鉄道やホテルを含む観光業など学生

の関心は多岐にわたり、スイスに関する文献もけっして少なくはない。私自身が持っているものだけでもゆうに70冊は越える。ところが、学生の原稿を見ると、参考文献は意外なほど少なく、主としてネットから得た出所不明の情報に頼って書いていることがわかる。敷居が高いからなのか、検索するのが面倒だからなのか、ともかく図書館はあまり利用されていないらしい。

明治大学には三つのキャンパスがあり、それぞれに図書館があるので、誰でも何らかの目的で一度は入館したことがあるだろう。新聞・雑誌コーナーで暇つぶしをしたり、CDやビデオを利用したり、開架式書庫の本をあさったり、授